

---

# ドラゴンクエスト.....ですよね？

ブレイド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンクエスト……ですよね？

### 【Nコード】

N1017BA

### 【作者名】

ブレイド

### 【あらすじ】

ある朝、目を覚ましたら目の前には某人気ゲームの代表的なモンスターである青いプルプルしているあいつがいた……でも此処何の作品なのかさっぱりわからん

## 0話 夢……ですよね？（前書き）

初めまして、私はブレイドと申します。

この度がにじファン様での初投稿となります。拙い文章ではありませんが、どうか暖かい目で見守ってくださいれば幸いです。

それでは ようこそ、ファンタジーあじえない世界へ

## 〇話 夢……ですよね？

夢 それは幻覚のようなものでまるであたかも現実のようにすら感じる時もある人間が眠りに就いている時に見るもの。

たしかレム睡眠とノンレム睡眠というものが関係しているとテレビで見たことがあるが、詳しくは思い出せない。だが今言えることは俺、鈴木<sup>すすき のぶなが</sup> 信長は今夢を見ているのだという自覚だけだ。

「ぴ、ぴぎい〜！」

夢を夢と自覚するのは難しいだろうが、流石にこれは夢だとはつきりと言える。腕に伝わる感触や振動がやたらとリアルに感じるけど、夢とはあたかも現実のような幻覚なのだからこれもそうなのだろう。

「ぴぎいいいいいい！〜！」

耳がキーンとするが、これも幻聴なのだろう。

最近の夢というのは本当に現実みたいだ、はっはっはっ。

「ぴい〜……ぎいいいいいいい！〜！」

ガブリ。腕に強烈な痛みが走るがこれも幻痛なのだろう。腕の皮が千切れそうな位痛いのが直ぐに消えてなくなるだろう……。

……………って、

「いったいわああああああああ!!」

腕を思いつき振り振って腕に噛みついた“生き物”を剥がそうと試みる。するとあっさり腕から離れた“生き物”は器用に着地すると俺の方を見上げてきた。

「ガLLLLLLLL」

愛くるしいボディとは裏腹にいつちよ前に野生の生物独特の威圧感を放っている眼前の青くてプルプルしている生き物に俺は思わず後ずさりしてしまった。

「くっそ！ 夢の癖になんだってんだよ!？」

噛まれた腕は今も赤く腫れておりちよっと血も滲んでいた。これは本当に夢なのか!？

夢だとしたら相当性質が悪いぞ！

「ガLLLLLLLL」

「……やるうつてのか？ 言っとくが俺は中学まで剣道やってたんだぞ」

今は木刀すら持っていないので剣道をやったなんて全く関係はない。ただ自分はそういう経験を持っているという自信を持ちたかった。そのための鼓舞的な意味を込めて言ったのだが目の前の“生き物”には全く効果はなかったようだ。というか耳つてあるのかこいつ？

「はあ、どうしてこうなった？」

目の前にいる夢の中の生き物……いや、もう夢とか言っていていられない。これは現実だ。痛む腕も、あいつから感じる威圧感も夢なんかでは断じてないリアルな体感だ。

「なんで俺は“ドラクエのスライム”に襲われてんだよちくしよお  
おおおおおおお！！！！」

「ぴぎゃあああああああ！！」

高々に声を出すと同時にスライムが俺に襲いかかってくるのを見たのが、意識を失う前の最後の光景だった。

ちくしょう、夢であってくれよ……。

## 0話 夢……ですよね？（後書き）

この度は私の拙作を読んでいただき、誠にありがとうございます。  
0話、プロローグとなります話はいかがでしたでしょうか？ 短いながらも楽しめたと思う方が一人でも居られたなら今後の励みと致します。

次回より物語を進行していきます。今後の展開の構想は練っているので、しばらくは安定した更新速度（週に3，4話位）を保てると思います。今後もその速度を保つよう頑張ります。

1話 ドラゴンクエスト……ですよね？（前書き）

ブレイドです。この話より物語が進行していきます。主人公のやきもきとした心情を上手く表現出来れば良いのですが……

## 1話 ドラゴンクエスト……ですよね？

「いつてえ……あんにやる至るところ噛みついていきやがったな？」

スライムにボコボコにされてから暫くして、目が覚めた俺に訪れたのは体中に走る痛みの数々だった。

気を失う前は腕だけだったそれは今では足やら顔やら至るところがジクジクとする。鏡なんかがあったらそれはそれは見事な歯型がついてるだろう。立ち上がることは出来たが、動く度に全身に痛みが走るのを感じて思わず顔をしかめてしまう。

いくらなんでも怒りすぎだ。いきなり力一杯抱きしめたのは悪かったけど此処までひどくはしてないぞ……。

「にしても……スライム、だったよな？ ドラゴンクエストの。」

どうなってるんだよ？ 俺は確か自分の部屋で寝てた筈だぞ」

それが目を覚ましたら目の前にスライムがいて、あのプルプルした目で俺を見ていたわけだ。びっくりして思わずスライムを抱きしめちゃったよ。なんで抱きしめたのかは俺にも分からないけど。

「本当に、夢じゃないんだよな？」

ポツリと零したつぶやきに答えてくれる者は誰もいない。それこそさっきのスライムでもいればマシだったのだが今は近くに何もいないのだ。鬱蒼と生えている木々の葉を風が揺らす音があったという間に俺のつぶやきを掻き消してしまい本当に俺は今一人ぼっちなの

だと思い知らされた。

「おい……おい誰かいないのか！ 誰でもいい！ 誰か、誰か返事をしてくれよ！！」

痛む体を無視して俺は森の中を走った。誰か人はいないか、どこかに家は建っていないか、藁にもすがる思いで木々の間を抜け、藪を抜け、獣道をずいずいと突き進んでいった。

しかし、家はおるか人っ子一人見当たらない。どこまで行っても辺りは森、森、森。景色すら変わらない様子に俺は近くの木の根に腰掛けた。

「だれか、だれでもいい。だれかいないのかよお……」

どんどん涙声になっていっても、誰も答える者はいない。俺はずっと一人なのか？ そう考えていると目の前の藪が突然ガサガサと音を立てはじめた。

バツと顔を上げ、誰か来たのか！ と希望を持った俺の目の前に現れたのは人ではない。青い体にプニプニボディを持つ生き物……さつき俺の全身を噛んでいった奴と同じスライムだった。

「なんなんだよ……何なんだよ！」

画面の向こうで見慣れたあの顔だが、今の俺にはスライムが俺を嘲笑っているようにしか見えない。遂に堪忍袋の緒が切れた俺は近くにあった木の枝を拾い上げヘラヘラとしているスライム目がけて大きく振りかぶった。

「ぶっ、飛べえ！」

大きく横薙ぎに振った木の枝がスライム目がけて振るわれた。  
しかしスライムはというと生意気にもジャンプして俺の横薙ぎを避けてみせた。……スライムの癖に！

「避けてんじゃ、ねえ！」

「ぴぎい!？」

スライムが着地したのに合わせて蹴りを入れると今度はしつかりと命中し、足にサッカーボールを蹴ったような感触と共にスライムが宙を飛んだ。ざまあみる、と内心で零して少しだけすつきりした。

「ぴ、ぎいいいい」

しかし今度はスライムの方がその表情を歪めて俺を睨んできた。俺に蹴っ飛ばされたのが相当ムカついたらしい。だが、俺もまだまだやり足りないと思っていた所なのでスライムがやる気なのを見てむしろ好都合だとすら考えている。

ゆっくりと木の枝を構えてスライムと向かい合う。剣道の構えなんて二年振り位だが意外と体は覚えているものなんだな。

「……こいよ」

「ぴぎやあああああああ！」

「おっ、せえ！」

飛びかかってくるスライムにタイミングを合わせて木の枝を振るう。するとさつきとは違いスライムに叩きつけるような形で木の枝が命中し、スライムは地面に派手に叩きつけることが出来た。これ

は蹴り飛ばした時以上の痛さだろうなと考えていると当のスライムはヨロヨロと立ち上がった。

「結構良い感じに入ったと思ったんだけどな。やっぱ木刀とかじゃないと駄目か」

「びぎい……」

しかしそれでもスライムは随分と弱っているようではずると言うような形で俺から逃げようとしている。普段の俺なら見逃しても良いかと思うのだが、今の俺にはそんな寛容な心は持ち合わせてはいない。大人しく往生しやがれということ、今度は木の枝を高くと振り上げる。剣道でいう上段の構えである。

「これでトドメを刺してやる　おら！」

瀕死のスライム目がけて上段から力一杯木の枝を振り下ろした。しかしスライムも必死なのか先程までのヨロヨロした様子から一転素早い動きで近くの藪の中に飛び込んだ。……逃げられたのだ。

「ああ！？　くそっ、逃げんなこら！」

とつさにスライムの飛び込んだ藪に近寄るも鬱蒼と生い茂っている藪の中で小さなスライムを追う事は不可能だ。

「ちつくしよあー……スライムに逃げられるなん「あっははははははは！　おっかしー！！」て？」

いきなり真上から甲高い笑う声が聞こえてきた。まるで腹の底から笑っているかのようなその声。俺は咄嗟に顔を上に向け、目をぐ

るぐると動かして声の主を探す。すると　　いた。近くの木の枝に座る一人の少女が。

やっと人に会えた。そんな喜びもつかの間で俺はすぐに少女の容姿に目を奪われた。目尻に涙を浮かべ、口元を手で隠す女の子らしい仕草に、ではない。日本ではまずお目にかかれない若草色の長い髪。少女の横顔に普通お目にかかることはないであるう長い耳。俺はその姿から少女が何なのか、知らず知らずの内に声に出してしまっ

た。  
「ドラクエの、エル、フ……?」

スライムだけなら兎も角、どうやらここは本当にドラゴンクエストの世界のようだ……。

## 1話 ドラゴンクエスト……ですよね？（後書き）

1話 ドラゴンクエスト……ですよね？ をお読みいただき誠にありがとうございます。

如何でしたでしょうか？ 突然変な世界にやってきてしまった主人公の不安定な心情を頑張って表現しようとしてみました。実際に異世界にいきなり送られたら誰でも心が不安定になってしまうのではないのでしょうかと思ひ、こういう表現といたしました。

さて、最後に登場した少女、彼女は一体何者なのか？ 彼女の存在は信長にどんな影響を与えるのか

次回、「エルフ……ですよね？」をお楽しみに！（次回予告つて、要りますか？ 個人的にはノリで入れているのですがw）

2話 エルフ……ですよね？（前書き）

主人公ノブナガが出会った少女。それは普通の人間にはまず存在しない長い耳……。

少女は一体何者なのか……（タイトルで丸分かりだった？ そんなの……普通じゃ考えられない……）



案の定エルフラしき少女は揺れる木からバランスを崩して落ちそうにしている。その時にちょっと服の下から聖域が見えたりした人が人を笑った償いとしてもらおう。役得役得。

「ふう、あつぶないなあ」

「人を笑ったりするからだ耳長娘」

「つてうわ！？ 君いつの間にならぬて来たの！？」

「お前が俺を笑いまくってる時にだよ」

もしかしてこのエルフラは所謂アホの子なのか？ 二次元でのアホの子はまだ許せるが、実際にアホの子を目の当たりにすると呆れて物も言えなくなるな……。

「まあ良いや。よっこいしょっと」

呆れている俺に気づいた様子もなくエルフラが木から飛び降りてきた。俺の身長の上の倍以上の所から飛び降りたというのにあっさりと着地してみせた。

身長は俺より少し低く、年齢は俺とそれほど変わらないように見える。とはいえ俺もそこまで低い方じゃないので少女の身長は平均よりは高いかもしれない。

あどけない表情を浮かべる少女にリアルではコスプレ会場を除きお目にかかれないであろう長い耳が目に入る。なんとなく耳に手を伸ばしたくなつたが流石に自重しろ、俺。

「ところで、さ。此処はそのお……何所なんだ？ 地名とかでも良

い。教えてくれないか？」

せっかく話せそうな人を見つけたのは良いが、もし此処が本当にドラクエの世界でこの少女がエルフだとしたら正直心配だ。

ドラクエシリーズにおいてエルフは人間を恐れていたりとあまり良い感情を持ってない。ここで彼女に逃げられてしまったては俺はこの森で惨たらしく野垂れ死ぬことになる。慎重に、相手を怯えさせないよう注意が必要だ。

しかし、

「変な恰好ね、貴方何所から来たの？ その傷スライムにやられたの？ ごめんね、笑っちゃって」

なんでこの娘こんなにテンションたっけーの？ 怯えるどころかめっちゃ友好的なんですけど。

「その前に俺の質問に答えてくれない？ 此処は何所なんだ？ 町とか村とか、近くにないのか？」

「此処？ 此処は【迷い人の森】冒険者も寄り付かない一度入ったら抜け出せないって言われてる森よ。確か……村位なら森を抜ければあったと思うけど」

「【迷い人の森】？ 聞いたことないぞそんな名前の森なんて……」

少なくともドラクエシリーズにそんな名前の森は存在しない。此処はドラクエの世界じゃないのか？

「私達”は昔からこの森に住んでるんだけどね。人間が入ってくるなんて珍しいから思わず見に来ちゃった。本当は駄目なんだけどね。君がスライムに苦戦してるのを見てるとおかしくって」

ああ、このエルフはまだ人間が何故怖いとされているのかよく分かっていない若いエルフなんだな……。じゃなければこんな風に友好的に接してこないだろう。

ある意味そのおかげで俺は九死に一生を得た訳だが……。この娘いつか誘拐されるんじゃないか？

「とにかく、近くの村はどっちの方角か教えてくれないか？ 案内は……。別にいらなから」

チラリと少女の耳に視線を動かし、暗にエルフを人の多いところには連れて行かない。そういう意味を込めて方角だけと言ったのだ。少女もそれは分かっているのかピシッとある方向を指さし、その方向に真っ直ぐ進めば村に出ると教えてくれた。アホの子と言ったことは訂正しよう。凄く良い娘だ。

「ありがとな、俺は鈴木 信長。縁があつたら、また会えるかもな」

「スズキ？ ノブナガ？ 変な名前ね。二つも名前があるの？」

変な名前と言われて少々カチンと来たがそれは表に出さない。結構気に入ってるんだぞ、信長って名前……。

「いや、信長が名前なんだが……。ノブナガで良いぞ。周りにもそう呼ばせてるし」

「ノブナガ……。ノブナガ……。うん、覚えた。私はメアリー。メアリーで良いよ？」

そんなやり取りをした後メアリー、いやメリーとは別れ俺は真っ

直ぐメリーに指さした方向へ進んでいく。途中またスライムとかに出会わないかヒヤヒヤしたものだ。が運よく何も出会わずに森を抜けることが出来た。

森を抜けた瞬間安堵からボロボロと泣いてしまったが体感で半日近くぶりに太陽の下に出れたのだ。限界だった。

「ああ、くそ、この年になってマジ泣きするとか思ってたぞ……」

服の袖で目尻を拭いメリーの言っていた村を探す。するとそれほど遠くない所に煙が上がっているのが見える。誰か人がいるのだ！あれほど痛む体の傷がまるで嘘のように晴れ、その煙が上がる方向へと駆け出した。煙だけだったのが徐々に家が並ぶようになり、モンスター除けなのか、家畜を逃がさないようにしているのか周囲を囲む柵があり、そして人々が行き交う様子が伺える村の門へと辿り着いた……。

「は、はは……人だ。人が、沢山いる！」

その場に膝をついて喜びを噛みしめた。俺は助かったのだ、そんな喜びに浸っている俺を周囲の人々は怪しい者を見る目だったが俺は全く気にしない。

「と、とにかく誰かに此処が何処なのか聞かないと……」

とはいっても一体誰に聞こう？ 周囲の人は俺が視線を向けると腫物みたいに顔を背けるし、声を掛けようとしたら露骨に立ち去られた……。

改めて自分の体を見まわしてみる。スライムに噛まれて歯型やら血が滲んでいる服装に加え、森の中を歩き回った時に付いた泥に汚

れた体……うん、悪い印象しかないな。

「せめてどっかで体洗っておけば良かった……水場なんてなかったけど」

後悔している俺を余所に遠巻きで村人達がガヤガヤを騒いでいる……俺を不審者と見ているのだろうか？ 不味い。ここで村を追いだされたら今度こそ野垂れ死にだ。

「ちょ、俺は別に怪しい者じ」お前か？ 報告にあつた怪しい奴は！」だから怪しい者じゃないっての！」

村人達を掻き分けて一人の男がズンズンとこっちに近づいて来る。かなりがっしりした体付きだ。さっきのスライムの攻撃なんかでは全く怯みそうにないくらいに。

「お前さん、どっから来た？ こっちは村の裏門だぞ」

「えっと、ま、迷い人の森から……」

俺がそう言うと村人達は途端にどよめき始めた。何か俺変なこと言っただか？

「この先には確かに迷い人の森つつー森がある。だがその森の名前は地元の奴しか知らねえただの人間が出てくることは絶対に出来ない森だ。手前、どこでその名を聞いた！」

屈強な男が詰め寄ってくる。正直威圧感が尋常じゃない。直ぐにでもボコボコにされてしまいそうな状況に俺は森の中で少女から名前を聞いたと答えた。

「森の中に女の子だあ？　おい、嘘じゃねえだろうな？」

恐怖から、俺は首を縦に振るしかない。すると男は何を思ったのか俺の腕を掴みどこかへ連れて行くこうとする

……まさか、このまま殺され！？

「は、放せ！　放せえええええ！？」

「落ち着けよ、治療の出来る所に連れてくだけだよ」

「……へっ？」

呆然とする俺を連れて男はとある建物の扉を蹴っ飛ばすように開けた。

かなり大きな音がしたが、この扉全く壊れる様子がない。相当頑丈なんだろうか？

「親父！　ちよっくらこいつ見てやってくれ」

「毎回言わせるな！　ドアを蹴破るんじゃない！」

毎回って……豪快な男過ぎるだろう！？　ということはあれか？  
毎回蹴破るこの男用にわざわざこの建物の扉は頑丈に作られてるってことか！？

この男もそうだが目の前の爺さんもまたかなり豪快な性格のようだ……。親父と呼んでいたが、まさか親子か？

「固いこと言うなって。ほれこいつだ」

「なんだこのガキは？　せめて泥位落としてから連れてこい」

ブツクサ言いながら爺さんが何やら皮袋を俺に投げしてきた。中身を見れば数種類の草に小粒位の実がいくつか入り混じっている。これは……やくそうか？

「草は手で揉んで傷口に張り付けて、実は嚙まずに飲み込め。そうすりゃ明日には治ってる」

どうやらゲームのように速攻で回復するわけではないらしいな……とりあえず言われた通りやってみる。

「っくうっくうっくうっく！？」

が、このやくそうもの凄く傷に染みた。涙目になりながら傷口に草を張り付けていく俺に男と爺さんは呆れた様子だ。

仕方ないだろう、マキオンよりずっと染みるぞこれ……。

「んで？　このガキは一体何なんだ？　冒険者……にしては情けねえ面してやがるが」

「さあな？」

「おい、ふざけるな」

「本当に知らん。だが、迷い人の森でエルフに会ったらしい。だから連れてきた」

「このガキが？　何かの間違いだろう」

「あの」

「一通り傷口の手当を終えて二人に話しかけると同時に「何だ？」と答えてきた。やっぱり親子だろこいつら……。」

「あの女の子のことなんだったら、多分エルフで合ってます。耳も長かったし」

「……あの耳はやっぱりエルフしか持ってないよな？」

「耳かよ……まあ、それも一つの判断基準かもしれないねえがもうちょっと上手く説明してくれ」

「えっと、それじゃあ……」

俺はこれまでに起きたことを掻い摘んで説明していった。

気が付いたら森の中にいたこと、スライムに逃げられたことを笑う少女のこと、その少女に言われた方角に進んだらこの村にたどり着いたこと。

話し終えた頃になると男は無言で俺をジロジロと見上げり下げたり、まるで品定めするように観察し、やがて納得したように頷いて見せると俺の肩に手を置いた。

「……悪かったな、疑って。まさか“迷い人”だったとはなあ」

「“迷い人”？」

「ああ、時折、どこからともなく迷い人の森に見知らぬ人間が入り込むことがある。その中でも極々稀に本当にどこから来たのかわからない奴もいてな、そいつらを俺らは“迷い人”って呼んでるんだ」

「“迷い人”は俺らとは違う。見た目は同じでも、在り方や考え方を包む雰囲気みたいなもんが俺らとは全然違う。だからエルフもお前さんに近寄ってきたんだろう」

男の言葉に続くように爺さんが喋りだす。

つまり、俺はこのドラクエの世界と違うところから迷い込んできた。ドラクエの住人じゃないからメリーも怯えていなかった。そういうことらしい。

しかもその“迷い人”の中でも俺は割と運が良い方らしく、村までの途中全くモンスターに逢わなかったのはあのメリーのおかげだろうとまで言われた。

メリー、あの少女は本当にエルフだったのか……本人には確認しないでいたが、こんな形で確認することになるとは思ってもみなかった……。

今度会った時に、改めて礼を言おう。また会えるかどうかなんて分からないが、俺はそう心に決めた。

## 2話 エルフ……ですよね？（後書き）

2話 エルフ……ですよね？ をお読みいただき誠にありがとうございます。  
ございます。

少女メリーはやっぱりエルフです。個人的にはドラクエシリーズのエルフは大好物なので絶対に外せない！ ということでキャストイング致しました。

そして現れる屈強な男と医者らしき爺さん……彼らもまた今後の物語における重要人物です。そんな彼らについては……また次回です！

次回、「退治屋……ですよね？」をお楽しみに！

### 3話 退治屋……ですよね？（前書き）

ヘタレな男ノブナガは“迷い人”と呼ばれるちょっと不思議な存在だった。しかし、この世界は一学生に過ぎない彼にとって生ぬるいものではない。ノブナガはこれからどうやって生き延びていくだろうか……

### 3話 退治屋……ですよね？

「うおおおおおおおおお！？」

「「「キイイイ！ キイイイイイ！」「」」

「こつちくんあああああ！？」

みんなこんにちは？ こんばんわ？ ノブナガだ！

今絶賛逃亡中！ 何からだって？ 後ろにいる悪魔達からだよ！

「「「キイイイイイ！」「」」

悪魔の名前は“ドラキー” 蝙蝠みたいなモンスターだ。

こいつらに挑むようになって半日経つけどまともに直視も出来ない。というかこいつらむっちゃでけえ！ 俺の頭より二回りくらいでけえ！

「無理無理無理むりい！ こんなん勝てるかあああ！？」

なんで俺がこんなバケモンから逃げてるかっていうと、それはあいつらに保護されたのが原因だ！ 絶対！

ちくしょう……絶対選択ミスったたる俺……。

「おい小僧。お前これからどうするんだ？」

白髪が目立つ爺さん、名前はランドさんと言っらしい。  
ランドさんが突然話しかけて来たのだ。

「どうするって……」

ぶつちやけなんでドラクエの世界に来たのかさっぱり分からない。  
ネット小説とかである転生とかじゃなくて本当に突然この世界に来  
てしまった。

元の世界に帰れるなら帰りたいが……

「帰れるなら、帰りたいですよ……」

「なんだよ？ 最初っから諦めてんのか？」

後ろから呆れたような声を掛けられる。

俺をこの建物に連れてきた屈強な男、アレスさんだ。やはりとい  
うかランドさんとアレスさんは親子だった。

「帰れる方法があるっていうんですか！？ あるなら教えてくださいさ  
い！」

「……」

言葉を荒げ、肩を震わせながらアレスさんに詰め寄るとアレスさんは苦い表情を零す。それから無言で天井に顔を向け、黙り込んでしまった。

「……あるんですか？　ないんですか？」

「……あゝいや、ないっちゃな「あるぞ」「おい親父!？」」

言葉を濁すアレスさんに割り込むようにランドさんが肯定したのだ。

俺はすぐさまランドさんに詰め寄り、その帰れる方法を聞き出そうとした。

しかし、

「今のお前さんじゃ無理だ。なんてったって弱すぎる」

「教えてくれるだけで良いんです!」

「駄目だ。まずは強くなれ、話はそれからだ」

「強くなれったって……そんな直ぐには」

「アレスを貸してやる。おい、この小僧を鍛えろ。それがお前の次の仕事だ」

俺の肩越しにランドさんが言うと後ろでアレスさんがうなだれる声が聞こえた。え？　何？　どゆこと？

「んな気はしてたけどやっぱりかよあ……しゃあない、おいお前名前は？」

「え！？ す、鈴木 信長」

「流石“迷い人”。変な名前だな」

「……ノブナガで良いです」

これから名前を聞かれた時はノブナガと言おう。いちいち変な名前って言われるのも癪に障る。

名前を言うや否やアレスさんに村の外に連れて行かれた。何をすのかと思っいたら小さな籠みたいなのを取り出して、何やらゴソゴソとしている。

「これはあやかしそうっていう草を材料にした香だ。これに誘われてきたモンスターをこれからノブナガ、お前に倒してもらおう」

あやかしそう……たしかドラクエ9で出てくる錬金材料だったな。モンスターを誘うなんていう効果はなかった筈だけど……。

しかもその誘ったモンスターを倒せって何言ってくれてんのこの人。

「いやいや、アレスさん。いきなり何言って」「ぴぎいー」「うっそあ？」

「スライム二匹か……腕を見るにはとりあえず十分か。ほれ、練習用の木剣貸してやるからやってみ」

「いやほれとか言われても！？ 俺スライム一匹でも怪しいでるか

らー!」

「そりゃお前素手と木の枝でだろ？」

「そりゃそつですけど!」

「とか言ってる内に来たぞー」

うぎゃあああああああああ!?

こっちくんあああああああ!?

「それが今では何故かドラキーに変わって数も三匹ってどうなってるのおおおお!」

「お、いたいた。おーい、追加な!」

「「「「びぎいいいい!」」」」

「ふざけんなあああああああ!」

結局その後ポコポコにされて、気が付いたらランドさんの医療施

設の中だった。

戦果としてはスライム七匹にドラキー四匹という感じ。どれも殆ど一対一の状況に持ち込んでだけどな！

「半日かけてそんだけかよ……こりゃ気が遠くなるくらい時間かかりそうだなおい」

「でもこいつ剣筋は悪くなかったぞ。要はあれだ、度胸がねえんだな」

「ほおー、度胸ねえ？」

ランドさんの顔がすっげえ怖い笑顔だ。嫌な予感がピンピンする。体が満足に動けたら今すぐここから逃げ出したい。というか這ってでも抜け出してやる！！

「まあ、逃げるなって取って食いやしねえからよ」

しかしそんな俺の背中にのしかかっけきやがった！ この人医者らしいのに怪我人になんてことを！？

「嫌だあああああ！ 絶対に嫌だあああああああ！？」

体が痛いなんて言ってもらえない。背中にランドさんを乗せたままずるずると進んでいくといきなり頭が重くなって床の距離が零になった。

「まあそう言うなって。おいアレス、確かゴーレム討伐の依頼が入ってたな？」

はっ！？ 今なんつったこの人！

「おい、親父。流石にそれは……」

よし！ 良いぞアレスさん！ 実際に俺の実力を見てたアレスさんなら心配にもなるだろう！ そのまま反対意見を押し通すんだ！！

「死ぬかもしれないけど別に良いか？」

つてそつちの心配かよおおおおおお！

「死なれると面倒だな……何とかしろ」

あんたもそんな心配かよおおおおおお！

「ん……まあ、何とかするか」

「いいいいいいいやあああああだあああああああ  
ああ！」

俺の魂からの拒絶は当然の如く無視された。

そして、夜が明けた！

「んじゃ依頼内容を確認すんぞ。依頼主はタナフ村。『村の炭鉱を掘っていたら眠っていたゴーレムを起こしてしまった。このままでは炭鉱業が行えないためゴーレムを倒してくれ』だよ。眠ってるゴーレム起こすってどれだけ派手な採掘してやがったんだろうなあ」

「知ったこつちやない。ともかく依頼文書に依頼金を積まれた以上。これは正式な契約だ。さっさと終わらせちまいなバカ息子」

「分かってるって」

なんか後ろでちやくちやく話が進んでいる中俺は簀巻きにされて  
転がっている。

もうどうにでもなれの精神で抵抗するのは諦めた。こいつら何が  
何でも俺を連れて行かせるみたいだし……

「問題は小僧だが……アレス、お前の装備ちよつと貸してやれ。古  
いのがいくつかあつたる」

「サイズが合わねえだろ……いや、待てよ？ あれならいけるか…  
…」

お？ なんか装備があるのか？ 死なないようなら大抵の装備で  
も我慢できるぞ。

ただしステテコパンツは勘弁してほしい……あれは防具と認めな  
い。

「旅人の服に皮の盾、皮の帽子か。いかにも初心者用って感じだな」

おい待て、待ってくれ。相手はゴーレムだろ？ なんでそんな防  
御力低い装備ばかりなんだよ、せめて鉄の胸当てくらいにしてく  
れよ！

「絶対死ぬから！ せめてもうちょい頑丈なのないの！？」

「金属系の鎧は全部サイズ測って作られてんだよ。これで我慢しろ」

「なら皮の鎧とかは！？」

「お前迷い人なのに防具に詳しいな……だが皮系の鎧は全くない。あれ匂いきついんだよ」

「ちくしょおおおおおおお！」

結局俺は旅人の服に皮の盾、皮の帽子を装備させられた。

意外に旅人の服が頑丈に出来ているのに軽くて気に入ったのだがそれでもゴーレムのパワーの前にはただの布きれ同様だろう。絶対に一撃でももらうことは出来ない……。

それにしても武器は渡されてないのだがどうすれば良いのだろうか？

「後は武器だが……今手頃なのがないんだ。悪いが武器はあの訓練用の木剣で我慢してくれ」

「岩の塊に木で挑めってか!？」

「しゃあない、これでも持つとけ」

流石にそれは無理だと言うとアレスさんが自分の剣を俺に渡してきた。かなり重量があっつてちよつとよろけてしまったがかなり使い込まれていて独特の雰囲気がある。おそらくかなりの修羅場をこの剣で切り抜けてきたのだろう。

「というか自分の剣を俺に渡してどうする気だ？」

「落とすなよ？ 大事な愛剣なんだからな」

「ん？ なんだ今回は素手で行くのか？」

「ああ。まあ、ゴーレムくらいなら大丈夫だろ」

マジで！？ ゴーレム相手に素手ってこの人は化け物か！？  
まさかアレスさんってバトルマスター的な職業！？

「んじゃ行くか。おいノブナガ、こっち来な」

剣を落とさない様におそろおそろアレスさんの横に行く。するとアレスさんが懐から羽のようなものを取り出し、空に投げた。あれはキメラの翼か。

「んじゃ親父、行ってくる」

それだけ言うと俺達は空高く舞い上がった。

結論から言わせてもらおうとキメラの翼による移動は快適ではなかった。視点は安定しないし早すぎて酔いそうになるし……はつきり言ってもう使いたくないってのが感想だ。

タナフ村に着くや否や顔色が真っ青になった俺を置いてアレスさんが村の村長に依頼内容の確認に行く間俺は近くの石段に座り休ませてもらっている。

この世界に来てもう何度目になるか分からないが自分が情けなくて仕方がない。こんな調子で無事に元の世界に帰るなんて出来るのだろうか……。

「はあ……」

「おいおい、溜息なんてついているとツキまで逃げてくぞ？」

「……話は終わっただんですか？」

「まあな。依頼の確認だけだから早いもんだろ。そろそろ行くか？」

正直言っただけ少し気分が悪い。だがこれ以上我が儘も言っただけなので俺は大丈夫とだけ言い立ち上がった。

村人の案内もあり炭鉱のある山までは特にモンスターに襲われることもなくスムーズに行くことが出来た。

炭鉱に近づくにつれて鼻の奥に火花をした時のような匂いが強くなってくる……。おそらく採掘に使う火薬の匂いなのだろうがかなり強烈な匂いだ。

「それじゃ俺はこの辺で……例のゴーレムは入口から真っ直ぐ進んだ先にいます。どうか、よろしく願います」

案内人も帰ったところで辺りを見渡せば荷車やスコップ、ピッケルなどの道具が散乱したままで放置されている。おそらくゴーレムが暴れた時に全部置いて逃げてきたのだろう。

「気をつけるよ？ かなり狭いところで戦うことになりそうだ」

危ないから後ろで見ていると言わないのがアレスさんだ。今回の目的は俺に度胸を付けるためだから戦わせることは最初から決まっていたようなものだからなあ……。

「帰りてえ……」

「ゴーストを倒したらな」

ニヤリと笑うアレスさんが非常に憎たらしく思えてきた。この人絶対楽しんでるだろ……。

ゆっくりと炭鉱の中を歩いていく。時折配置された蠟燭のおかげでなんとか視界は確保できているがそれでも暗い。足元に注意しながら進んでいくと急にアレスさんが話しかけてきた。

「今回みたいの仕事はな、本当ならもつと正式な依頼として“ギルド”を通して行われるんだ」

「“ギルド”？」

なんだそれは？ 聞いたことないぞ。

「俺たちみたいな冒険者が所属している組織だ。王都クルスに申請して許可が出たところが“ギルド”って呼ばれる」

俺もギルドに所属しているぞと言うアレスさんを余所に俺はある引掛かりを感じていた。

なんだ？ この違和感は……

「でもな、時折“ギルド”を通さないと依頼する輩もいる。“ギルド”を通すと金がかかるっていうのもあるが大抵は“王都にばれると困る”って輩が今回みたいに直接冒険者に依頼すんだ」

どンドン冷や汗を掻いているのが分かる。まるで爆弾の導火線を間近で見ているような感覚だ。

「この村が何を採掘してたのかは知らねえ。だが……」

グラツと地面が揺れ、重苦しい音が聞こえる……。まるで何かとても重い物を落としたかのような感じた。ゴーレムだろうか？ としては随分近いような……

「どつやら……目的とは違うもん掘り当てちゃったらしい」

えっ？ と聞き返すより前にアレスさんに思いつきり突き飛ばされた。

ゴロゴロと転がされた後、痛む体を起こしながら何をするんだと文句を言おうとしたらアレスさんが大きな岩を相手に蹴りを喰らわせていた……。あんなのさつきまであったか？

「ノブナガああああ！ 下がってる！ こいつは普通のゴーレムじゃねえ！」

叫ぶアレスさんに岩が襲いかかる。あれは自然の落石とかなんかじゃない。明確な意思を持ってアレスさんを襲いかかっていた。近くにかがり火があったのでそれを近づけてみると、アレスさんを襲っていた岩の形が見えてきた……。あれは……

「い、岩でできた腕？」

岩の腕が前後左右に動きながらアレスさんを殴っている。なんだあれは？ あんなモンスター見たことないぞ！

「あ、アレスさん！？」

「慌てんな！ これぐらい、なつと……」

転がる腕を両手でつかむとグルグルとその場で回転し、壁に向かって投げつけた。勢いもあり、壁に叩きつけられた腕は見事に砕け散り、炭鉱の中は再び静かになる。

「な、なんですか今の……う、腕みたいに見えましたが」

「実際腕なんだろ。依頼にあったゴーレムとやらのな」

そんな馬鹿な……ゴーレムってのはもつと均一のとれた煉瓦みたいな体の筈……あんな岩の塊みたいもんでもないし、そもそも腕だけを切り離して戦えるなんて聞いたことがない。

本当にここに現れたのはゴーレムなのか？

「も、戻りましょう！ 何が相手かわからないし、依頼内容と違うじゃないですか！」

「……」

俺の言葉にアレスさんが考える素振りをする。正体が分からないモンスターというのは実際にゲームでも対応なんて出来ない。それにこれはゲームじゃない。現実なのだ。命が危険にさらされているのだ。逃げた方が良くに決まってる！

だが、アレスさんはゆっくりと首を横に振った。

「いいかノブナガ。確かにこれは向こうが契約を違えたことだ。でもな、それでも俺は依頼を受けたんだよ。退治すると、言っちゃまったんだよ」

ポリポリと、頭を掻くその仕草に困った表情を浮かべるアレスさ

んを見て、この人は絶対に約束を破れないタイプの人間だと言う事が伺える。怖そうな外見とは裏腹に、実に誠実な人間らしい。

「まあ、やれるだけやってみようや。ただ剣は返してくれ。流石に素手じゃきつい」

俺は急いで剣を外しアレスさんに手渡した。剣を受け取ったアレスさんはゆっくりと剣を鞘から抜く。

その瞬間ゾワリと鳥肌が立った。目の前にいるアレスさんから尋常じゃない威圧感を感じる。まるで別人……いや、鬼だ。

「悪いな、お前の度胸付けはまた今度だ。ここからは」

俺の化け物退治の時間だ！

### 3話 退治屋……ですよね？（後書き）

3話 退治屋……ですよね？ をお読みいただき真にありがとうございます。  
ございます。

今回はノブナガが非常によわっちい一面を出していますが元々ノブナガはただの学生に過ぎないので戦闘とか出来ません。スライムやらドラキーを倒せてますがぶっっちゃけかなり弱いです。

そんなノブナガに謎のモンスターの魔の手が伸びる（片方は今回砕けましたが）

次回、「人間……ですよね？」をお楽しみに！

#### 4話 人間……ですよね？（前書き）

度胸を付けるため、無理やり連れてこられた炭鉱で突然の敵の攻撃、それに対してのアレスの変貌に驚きを隠せないノブナガ。そんなノブナガ達を待ち受けるのは一体何なのか、ノブナガが無事に生き延びることが出来るのだろうか……。

#### 4話 人間……ですよね？

剣を抜いたアレスさんがズイズイと炭鉱の中を進んでいく。俺はその後ろをかがり火を手について行くのだが正直言つて怖い。……アレスさんが、だ。

「……………」

さっきから無言のアレスさんだが、感じられる威圧感はどんどん増している気がする。下手に声をかけることすらためらわれる……。

だがそんなアレスさんの後ろにいるからか、恐怖の中にもある種の安心感のようなものもあつたりする。虎の威を借る狐というのはこういうことを言うのかも知れない。

「……………着いたぞ」

立ち止まるアレスさんの後ろから少し顔を出して奥を見してみる。途中の道に比べていくらか広い……それにピッケルなどが散乱しているのを見るとここで採掘を行っているのだろう。目を凝らして奥を見れば何やら大きく崩れた壁がある。なんだあれ？

「この辺りにいるはずだ……ここで大人しくしてろ」

そう言つとアレスさんがゆっくりと進んでいく。せめてかがり火をと思つたがすぐに動くなと釘を刺されてしまい広間の入口で動けずにいる。

そうしているとアレスさんが崩れた壁まで行ってしまった。ゴーレムは……まだ現れていない。

「何だこれは……何をしたらこうなる？　まるで壁を丸ごと吹き飛ばしたみたいな」

崩れた壁を見ているアレスさんを遠目に見ていると、俺の真横に拳大くらいの石が落ちてきた……危ない、あんなのが当たると痛そうだなと呑気なことを考えている俺とは違い、音を聞きつけたアレスさんがすぐさま反転しこちらに走ってきた。

「そこから離れる！」

突然大声で離れると言われたが一体どうしたのだろうか？　しかも視線は……上？　何を見ているのだろうか？　そんな軽い気持ちで上を見たことを直ぐに後悔した。

「……………ゴゴゴ」

「……………は、ハロー」

思わず英語が飛び出したがすぐに正気に戻ってアレスさんの方へ走った。なんだよアレ！？　ゴツゴツした岩の塊がこっち見てたぞ！

「……………ゴゴゴ」

俺が逃げるのと同時に岩の塊が動き出す。ちょっとだけ距離を置いてわかったのだが、さっきまで入口だと思って部分はゴーレム（？）の足の股のようだ。一步步くたびに炭鉱が少し揺れる……だが、その動きはともゆっくりなのであっさりとアレスさんのそばまで

回避することが出来た。

「……………ゴゴゴ」

入れ替わるようにゴーレム（？）に向かうアレスさんにゴーレム（？）が右腕を伸ばす。先ほどの腕は左腕だったらしく今は存在していない。

鈍重な音を立ててアレスさんを捕まえようとするゴーレム（？）だがアレスさんはそれをサラツと避けてみせ、手薄な胴体を両手に構えた剣で薙ぎ払った。

「グガアアアアアアアアアア！」

岩に覆われた体に剣がめり込む。ゴーレム（？）も痛みは感じるのか身をよじりアレスさんから距離をとった。

「……………」

アレスさんがちらりと愛剣を見る。何度か柄を握っては放し、また握り直す動作を繰り返すと再びゴーレム（？）に向かい駆け出した。

「オラア！」

ドガン！ 明らかに剣で叩き付けた音ではない音が広間に響き渡った。態勢を立て直したゴーレム（？）のパンチがアレスさんのいた所に叩き付けられたのだ。

思わずアレスさんは無事なのかと身を乗り出すと地面に突き刺さった腕の上を走って上るアレスさんの姿を確認できた……。マジぱねえあの人。

「……………ゴゴゴ」

しかしゴーレム(?)もただアレスさんを好きにはさせない。その場で足踏みをし、体を大きく揺らしてアレスさんを落とすとそのままサッカーボールを蹴るようにアレスさんを蹴っ飛ばした。

「があ！」

空中にいたアレスさんはそれを避けることが出来ずに吹き飛ばされた。ヤバイ！ そう感じた俺はすぐさまアレスさんの元に行こうとするがアレスさんは空中で体を翻し、見事着地するという人間離れた動きをやってみせた……………どうやった今の動き!?

「効いたぜ……………今のはな！」

口の端から血を流しながらアレスさんは再び剣を構えてゴーレム(?)に向かっていく。今度は胴体ではなく、足を中心に攻めていくようでゴーレム(?)を中心に円を描くような動きで攻撃しては離れるを繰り返していく。

「……………ゴゴゴ…」

鈍重なゴーレム(?)はそんなアレスさんの動きについていけず、誰もいない所に右腕を振るい、その隙を狙われ脚を斬りつけられていく。

何度かそんなやり取りを繰り返しているとバランスを崩したゴーレム(?)がひっくり返る形で地面に倒れ込んだ。これを勝機と見たアレスさんが果敢に攻めていくが俺はどうにも落ち着かないでいた。

ゴーレム(?)の動きが何やらおかしいのだ。まるで、何かを狙っているかのような……

「トドメだ!」

「! アレスさん、横に飛んで!」

俺の言葉に反応してとつさに横に飛ぶアレスさんの横を何かを通り過ぎていった。岩の塊のようなもの、さつきも目の当たりにしたゴーレム(?)の腕だ!! 残った腕がまるで生きているかのように宙に浮いている……そんな異様な光景だ。

「おいおいおい……マジかよ」

そう零すアレスさんを余所にゴーレム(?)はゆっくりと立ち上がった。

両手こそ無くなったが未だ両足は健在、その威力は先ほどアレスさんが体験してるので迂闊なことは出来ないだろう。それに加えて今度は独立した右腕も襲い掛かってくるのだ……戦況は悪くなったどころではない。

「くっそ! どうしろってんだよあんなの!」

思わず俺はそんな光景に悪態を吐いてしまう。実際に戦ってるのはアレスさんなのに、俺はなんて無力なんだ……。悔しさが胸をこみ上げる。情けない、こんな自分が情けない……。

「おらぁああああ!」

そんな俺の苦悩を吹き飛ばすかのようにアレスさんが声を荒げて

飛来する右腕を蹴り飛ばした。そして横目で俺を見てくる。その視線は何かを期待するような視線だった。

俺に何ができるって言うんだ。俺なんて、ただの学生だったんだぞ？ 今も、怖くて動けないってのに……何を期待してるんだ！？

「ノブナガ！ 腹あ括れ！！」

ビクリと体をこわばわらせる俺をしり目にアレスさんは再びゴーレム（？）に相對する。

当然、そんなアレスさんを狙ってゴーレム（？）の腕はアレスさん向かって飛来する。しかし、当のアレスさんかというとそれを一瞥ともせずゴーレム（？）向かって駆け出した。

そんなアレスさんの真後ろを飛来した腕が通りすぎる。そのまま飛来した腕は空中で方向を変えて……俺の方に飛んできた！？

「ちょ、なんでこっち来るんだよ！？」

「ノブナガ！ そっちは任せたぞ！」

「任せるなああああああああ！？」

まさかアレスさんこれを狙ってた？ わざと腕を俺の方に飛ばせるよう仕向けて自分は本体に集中するつもりか！ ちつくしよ鬼畜だあいつ！！

「くんなくんなくんあああああああ！！」

飛来する腕に背を向けて俺は逃げ惑う。ドゴン！ と真後ろの岩に突き刺さる音が聞こえる。チラリと後ろを見れば先ほどまで隠れていた岩が粉々に砕けているあんなの食らったら一発で合アウトだ！

「うぎゃあああああああ!？」

見なきゃよかった! 俺は逃げる速度を上げて腕から離れていく。しかしそんな俺を宙に浮いている腕は追いかけてきた。そしてまた真後ろでドゴン! という重たい音がする。

涙目になりながら逃げ惑う俺の視界にチラリとゴーレム(?)と戦うアレスさんの姿が目に入る。あいつ完全に勝負に集中してこっち見てやがらねえ!

「覚えてろよ!? ってまた来たあああああ!！」

さらに速度を上げて走って逃げる。すると最初に見た大きく崩れた壁に来たあたりで俺は手段を間違えたことに気付く。ここは……行き止まりだ!

「やっべええええええ!！」

すぐさま引き返そうとする俺の目の前に岩の塊があった。まるで君は実に馬鹿だなと言わんばかりに俺の周りをくるくる回るゴーレム(?)の腕に少タイラツとしたが事態は最悪だ。これ以上逃げるためには元の場所までまた走らないといけない。だがそれをこの腕は許さないだろう。悔しいが、俺はこの腕にここまで誘い込まれたのだ。 たかが岩の塊の分際で!

「上等だおら! やってやんよおおおお!！」

そう考えるとなんか吹っ切れた。そうだ、どんなに宙を浮いていようがたかが岩の塊なのだ。その動いはぶっちゃけ早くはない。要は避けながら対応策を練れば良いのだ。

「……………何かないか？　何か！」

そう思い現在の俺の手持ちを確認する。そんな俺を腕は何故か攻撃してこない。むしろ指らしきものを動かして挑発すらしてきている……………たかが岩の分際の癖に！

イライラしながら見回してみると現在俺が持っているのは意外と快適な旅人の服。ちょっと匂う皮の盾。かなり匂う皮の帽子、それに道中拾ったかがり火……………。まて、かがり火！？

「……………そういやここって炭鉱なんだよな」

右に左に視線を動かし、“あるもの”がないかを探す。するとちよつと先に“それ”は転がっていた。

「は、はは……………いけるかも」

ゆつくりと深呼吸をする。まっすぐに目的のものを見据え駆ける準備をする。挑発を繰り返していた腕もまたそんな俺に狙いを定めだした。さっきの追いかけてこを再開するつもりか？　残念だな。俺はもう勝機を見つけた！

「……………覚悟しろよ？」

自然と腕に向かって笑いかける自分がいた。もう、体は震えていない。

ダツといきなり俺は駆け出した。それに合わせて腕も再び攻撃を開始するがもう俺は後ろを見ていない。まっすぐと狙っている物に向かい“それ”を手にとった。筒のようなものが複数付き、それらの端から垂れた糸は束ねられている……………。

“ダイナマイト” そう俺の世界では呼ばれているがこっちは何と呼ばれているのだろうか？ まあ、そんなことはどうでも良い。かがり火の火を導火線に近づける。すぐに導火線の端に火が移り火薬の詰まった筒へのカウントダウンが始まった。

再び走り出す。タイミングを外せばこの作戦は失敗に終わるからだ。チラリと後ろを見る。腕はユラユラと揺れながらこちらに狙いを定めている。導火線が短くなる音を聞きながら機会を伺い……やがて腕がぴたりと動きを止めた！

「！ 今だ！」

大分線が短くなったダイナマイトを腕に向かって投げつける。一瞬遅く腕が俺の真後ろを突き刺すがそれをあっさりと俺は避ける。周囲を見渡し、隠れることが出来そうな岩を見つけると転がるようにその陰に入った次の瞬間！

ドツゴオオオオオオオオン！！

広間の中をすさまじい音が鳴り響いく。地面も今までとは比べ物にならないほど揺れ、陰としていた岩にも細かい亀裂が走るが崩れることなく爆発の余波を無事に受け止めきっていた。

数秒ほどして、振動や音も緩やかになってきたところで爆発したところを覗いてみる。

「うっわぁー、すっげ……」

爆発によってできたであろう半径一メートルくらいのクレーターみたいなのがあり、そこからモクモクと黒煙が上がっている……すさまじい破壊力だ。

「あの腕はどうなった？」

粉々になった石は辺りに散乱しているがあの腕の物とは限らない。確認するためにクレーターのそばにより周囲を見渡してみる。

「あ」

少しして、俺はあの腕が粉々になったことを悟った。茫然と“それ”を見ていたのだがだんだん笑いが込み上げてくる。次第に声を出して笑い始めながら“それ”を拾い上げた。

黒く焦げた、憎たらしい挑発をしてきたあの指を、だ。

「ははははは！ よっしゃああああああ！」

「おめでとさん、やるじゃねえか」

「うお！ あ、アレスさん！？」

突然現れたアレスさんが喜ぶ俺の頭をわしゃわしゃとかき乱してくる。力が半端じゃないので一緒に頭も揺れてしまい思わずこけてしまった。

「お、悪い悪い」

「酷いですよアレスさん……ってあのゴーレム（？）は！？」

「あれくらいどつっこねえよ。むしろ腕があった時のほうが厄介だったぞ」

ホレと指差す先にはバラバラにされたゴーレム（？）の末路が…  
…なんかとんでもない物を見てしまった気がする。

「にしてもまさか腕を倒すとは思わなかったぞ？ 精々俺が戻るまで相手してもらっただけのつもりだったんだが…やるじゃねえか」

ニカツと笑うアレスさんにはあの威圧感を感じられない。俺の知っているあのアレスさんの姿だ。

「にしてもなんだっただろうなああのゴーレムは…まあ、その辺は王都の連中に調査させるか」

「……王都の連中？」

「ああ、村の連中は王都に知られるのが嫌で冒険者の俺を雇ったみたいだが契約を違えるのは頂けねえなあ……っわけで、この依頼は俺個人じゃなくギルドに通された依頼っつーことにする」

「……はあ？」

「っつまりー。この依頼のことを王都守護隊っつーギルドの運営に携わる偉いさんに報告するってこった」

つまり……隠そうとしてたことチクるといふことか？

「何をしようとしたのか知らねえが、これでその企みもお終いだ。ギルドのメンバー舐めんなっての」

思わず目をぱちくりとして悪態を吐くアレスさんを見上げてしま  
う。

てつきり仕事と割り切ってたみたいだがアレスさんもこの依頼に相当ムカついていたらしい……。なんていうか、ドンマイタナフ村。助ける気はないけど。

「さって帰るかー」

「……はい！」

「ほうっ？」

「どうしました？」

「いや、ちっとはハキハキとするようになったじゃねえか」

「どういふことだろう？ 何か気に入るようなことがあったのか？」

「ほら、行くぞー！」

「ちょ、待って！？」

「はっはっはっ つう！？」

高笑いしていたアレスさんが突然脇腹を押さえうずくまった。なんだ？ どうしたんだ！？

「あ、アレスさん！？」

「……た」

「はい？」



ははは！ ぐまみろ！

#### 4話 人間……ですよね？（後書き）

4話 人間……ですよね？ をお読みいただき真にありがとうございます。

前半は主にアレス無双ですね。3話でチラツと書きましたが通常のゴーレムなら素手で倒せるくらいのレベルです。今回は少々特殊なゴーレムなので剣を使っていますがぶっちゃけ一撃もらってなかったらもつと余裕で倒せてますねww

後半はノブナガの初の強敵戦ですが3話あとがきでも書いたように……文字通り魔の手が伸びてきましたww3話での片方の腕の来襲はその伏線だったのですよ！ なんとか倒すことが出来ましたがぶっちゃけ運要素とアイテムでの勝利ですね。実際に戦ったら絶対に負けますww

初の強敵戦を終え、帰って早々ランドからの突然の宣言。混乱するノブナガの前に現れたのは……

次回、「再会……ですよね？」をお楽しみに！

## 5話 再会……ですよね？（前書き）

依頼にあったゴーレムはノブナガの知らぬ姿形。腕を切り離し行動できるその異様な光景はノブナガに確かな覚悟を決めさせることが出来た。

文字通り、魔の手を退けたノブナガ、しかし変わったゴーレムに不覚をとり怪我をしてしまったアレス……。これから、どうなるのだろうか？

## 5話 再会……ですよね？

ゴーレム(?)を退けた俺とアレスさんはタナフ村への報告もそこそこにキメラの翼でランドさんが待つヨリの村へと帰還した。その時の村人達が一齐に青ざめていく表情に一体何をしていったんだかと不安になったが、一気に捲し立てるアレスさんにタナフ村の人々は反撃する間もなく撃沈。言うだけ言って早々にキメラの翼でさようならをしたわけだ。

「ぐう！ き、キメラの翼の着地がむちゃくちゃいってえ……」

「結局村まで歩いて、さらにキメラの翼使ったのに着地できるアレスさんマジで人外ツス……うつぶ」

痛いと言う割にはまだ顔の表情はちよつとゆがむ程度だし……それよりもキメラの翼のよる飛行酔いに苦しむ俺の方が見た目には重症かもしれない。

ヨリの村(さつき知ったのだが俺がたどり着いた村の名前だった)の入口からアレスさんの肩を担ぎゆつくりと門を潜っていく。俺達に気付いた村人達がどよめき立ち、数人の人々に助けられながらランドさんの待つ医療施設へと駆けこまれた。

アレスさんとは違いちゃんと手を使い扉を開ける村人に何故かちよつと安心する。そんなどうでも良いことを考えていると怪我をしているアレスさんが医療施設内のベッドに寝かされていた。手の空いている人がランドさんを連れてきている辺り手間がかかってない。

アレスさんが寝かされているのを見て流石のランドさんも少々目つきを変えて症状と怪我の確認を行っていく。周りの村人に見守られながら触診を終えたランドさんがゆっくりと振り返った。

「あばらが三本ほど折れてやがる。内臓は傷ついちゃいないみたいだが一回詳しく検査が必要だな」

ランドさんの言葉に回りの人々が安堵の声を漏らした。命に係わるほどではないからか人々は一人、また一人と診療所を後にする。

最終的に俺とランドさん、そして寝かされたアレスさんが診療所内にいるだけとなる。村人達がいなくなったところですつと黙っていたアレスさんがゆっくりと口を開いた。

「親父、実際にはどうなんだ？」

「折れたあばらは五本。しかも折れた骨が内臓に刺さってる……早くでかい医療施設入れないと死ぬぞお前」

「これでも飲んでおけと渡された薬草の実を嘔き出した。死ぬ？誰が！？」

「あーやっぱなあ……とりま簡単に死なないようにだけ頼むわ」

「今特やくそうしこたま持って来てやる」

今さつき死ぬとか言ってた人達とは思えないほど緊張感のかけりやり取りだったが実際かなり洒落になってない状況なのではないか？

「ちょ、ちょっとアレスさんなんでそんなに冷静なんですか！？し、死ぬかもって」

「あん？ 人間死ぬときは転んでも死ぬんだぞ？ それに今すぐ死ぬってわけじゃねえよ」

やべえ血も吐いてないしなと高らかに笑うアレスさんにやっぱりこの人死ぬタマじゃねえわと俺も一緒に笑った。

少ししてランドさんが右手に皮袋を持って戻ってきた。中をチラッと見てみたが葉っぱのような草に黒い粒という組み合わせでちょっと俺が使ったやくそうに似ていた。あれが特やくそうなんだろう。

「とりあえずこれ飲んで大人しく寝てやがれ。明日王都に連れてってやる」

「……その後こつちには？」

「帰ってこれるわけねえだろ馬鹿野郎。せつかくの休暇はお終いだ」

そう言い放ったランドさんの表情は怒りに染まっている。休暇？ 休暇ってなんの休暇なんだ？

「俺らはもともと王都にギルド構えて活動してんだ……」

しよぼくれた顔のアレスさんが一つずつ解説を入れてくれる。

曰く元々王都クルスという所でギルドを構えていた二人だが大きな依頼を終えて少し暇が出来たからギルドのメンバー全員に休暇が出たらしい。しかもそのギルドの代表がランドさんだっていうんだから結構驚いた。

「王都には実力のある医療員がいるからな。今日中に伝言だけ伝えて明日速攻でそいつに回復魔法かけてもらう」

おお、やっぱり回復魔法とかあるんだな……流石ドラクエの世界だ。

……待てよ？ 明日王都に行くって……俺はどうなるんだろ？

「あの、俺は？」

「小僧は……連れて行くのか？」

「判断俺かよ！」

「お前に面倒を任せたらうが」

ランドさんの考えるのが面倒臭いと言わんばかりの発言だがアレスさんもまたどうすれば良いか考えあぐねているようだ。

ここでダメだと言われたら俺はこれからどうすれば良いのか……それだけは避けたい。

「あ、あの！」

俺の声に二人がこっちの方を見る。

「お、俺も連れてってください！」

何か言われる前に俺から行きたいという旨を伝えた。ここでダメだと言われても、何度でも食らいついてやる覚悟だ。しばし、診療所の中に無言の時間が続く。

そして、

「……良いぜ」

諦めたような表情のアレスさんが了承の言葉を零した。

その言葉を聞いて俺はホッと一息を吐いた。良かった……本当に良かった……。

「その代り、お前さんもウチのギルドに入るんだ。そして俺の言うことを必ず守ること」

「はい！」

「くっくっくっ、元氣の良い弟子が出来たじゃねえか」

「弟子じゃねえ。怪我人置いていくような奴弟子にはしねえ、精々使えばしりに使ってやるだけだよ」

そういうとアレスさんは布団にくるまり寝てしまった。あれか？照れ隠しか？

「くっくっくっ、おい小僧。お前さんももう寝な。明日ははええぞ」

「はい！」

「……寝れん」

ランドさんに寝ると言われて興奮冷めやらぬ様子で俺はあてがわ

れた部屋へと駆けこんだ。

すぐさまベッドにもぐりこむが興奮して中々寝付けない。まるで遠足前の子供みたいだなと自分で自分を笑ってしまいがやはり落ち着かない。

「……はあ」

のそつとベッドから起き上がり、月明かりの差す窓へと近寄った。元の世界ではこんなに綺麗に月は見ることがなかった。星々も良く見える。ロマンティストではない筈なのだが、なんとなくこれらを見ていると心が落ち着く気がした。

「何言ってるんだか」

思わず軽く嘖き出した。我ながら変に緊張しているらしい。笑うツボがさっぱり分からん。だというのに何故か笑うことを止められない。

「はっ！ あはははは……」

笑いすぎて涙が出てきた。周囲は既に寝静まっているので声を殺して笑っているのだがそれも限界近い。高らかに笑う場所が欲しいな……

「外、行くか」

口に手を当てながらこつそりと診療所を抜ける。扉を開け、まっすぐ村の門へと走る。門を抜け、少ししたらもう森の近くだ。そこで、ついに俺は耐えられなくなった。

「はっはっは！ あっははははははは！！！」

うずくまり、腹を押さえて笑った。目から涙も零れ落ちる。ポロポロと、次々に零れ落ちる。笑い声も徐々に涙声に変わり、終いには完全に泣き叫び始めた。

その時になって気付いた。俺は笑いたかつたんじゃない、泣きたかつたんだ。そう気づくと更に泣き声は大きくなった。

「ぐ、ぐう……ううう……うあああああ！！！」

帰りたい、元の世界に帰りたい。そんな気持ちに押しつぶされそうだ。家族の顔、友人の顔、思い出す度に泣き声が大きくなる。

どれくらい経っただろう？ 漸く涙が収まってきた頃には空が少し明るくなり始めていたから結構長い間泣いてたと思う。

「あゝ……」

泣き声以外で久しぶりに声を出したらガラガラな声で自分でも驚いた。目尻を服で拭い、ボーっと座り込む。良く考えたらこんな所で泣き喚いて良くモンスターに襲われなかったよなあ……。まあ、モンスターも寝てるんだらうけど。

「……………」

ジーツと迷い人の森を見やる。俺は気付いたらこの森にやってきていた。何故俺なのか、どうして俺なのか、それは泣き喚いた時に散々と考えたが結局分からず仕舞いだ。

何を言っても俺がこの世界から戻る方法はランドさんから言わせられない。ここで何を考えたとしてもそれは結局解決には繋がらない……。だからこそ連れて行ってくれと言った訳だが、

「何となく来たくなくなったよなあ……」

ゆつくりと腰を上げて立ち上がる。視線は迷い人の森のままだ。

迷い人の森、ただの人間には絶対に出ることが出来ないとされる森。ゆつくりと歩き始める。俺はある種の確信を持って再びその森の中に足を踏み入れた。

藪を抜け、木々の間を潜り、どんどん森の中へと進んでいく。既に周囲は木々に覆われて出口は見えない。それでも俺は足を止めなかった。

「……」

一五分程して、俺は目的の場所に辿り着いていた。やはり俺の力に間違いなかった。目の前の木に手をあてがう。そこにはくつきりと残された俺の靴跡がある。

そう、この木は昨日俺が思いっきり蹴って揺らしたあの木だ。この木の上であのエルフの少女、メリー

が俺を見ていたのだ。何で此処に来たのか、というより何で此処に来たのか……。それはきっと、ある種の運命なんだと思う。

「……よっす」

「こんばんわ。それともおはようかな？」

靴跡の残る木の上、あの時のままの姿でエルフの少女、メリーが座っていた。

## 5話 再会……ですよね？（後書き）

5話 再会……ですよね？ をお読みいただき真にありがとうございます。

ちよつと4話が長すぎたかな？ と思い5話はちよつと短めにしてみました。怪我をしたアレスの治療までの話とラストのエルフの少女、メリーとの再会が今回の内容になります。

普通あばら折れて内臓傷ついたら痛い所では済まないのですがそこは人外認定アレスさんです。死なないし意外と元気です。流石に本格的な治療は必要ですがwそして、ラストに登場したメリー……。

次回、「冒険の始まり……ですよね？」をお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1017ba/>

---

ドラゴンクエスト.....ですね？

2012年1月5日00時53分発行